演題番号：D7

3椎間以上の同時減圧手術を実施した胸腰部多発性椎間板ヘルニアの犬11例における術後経過

○寺尾将司，長谷川裕基，植村隆司，小澤剛，神志那弘明

KyotoAR動物高度医療センター

1. はじめに：犬の胸腰部椎間板ヘルニア（IVDD）は手術が適応される胸腰部脊髄疾患である。ハンセンⅡ型IVDDでは病変が多発し主病変を特定できないなどの理由で複数椎間を同時手術することがある。しかし、適応について明確な指標はなく特に３椎間以上行う機会は限られている。今回、我々は３椎間以上の手術実施症例の合併症および術後経過を回顧的に調査した。

2. 材料および方法：令和４年10月～令和６年５月に胸腰部脊髄障害のため当施設を受診した犬のうち、MRIで多発性IVDDを疑い1回の手術で3椎間以上を減圧した症例を対象とした。症例情報、手術時間、合併症、術後経過を調査した。他疾患により評価が困難になった症例はその時点で観察終了とした。

3. 結　果：対象は11頭38椎間でチワワが８頭を占め、全体の年齢中央値は12歳（8-14歳）。手術時に歩行可能な症例は７例、歩行不可能な症例が４例であった。手術時間の中央値は137分（90-300分）、１椎間あたり42分で術者の経験年数が上がるほど短い傾向にあった。術中所見より２例で硬膜内IVDDを認めた。合併症として術中低血圧が２例、術後の悪化２例、気胸１例、眼疾患１例であった。術後に悪化した２例のうち１例は硬膜内IVDDの症例、１例は腰膨大部を手術した症例であり手術翌日に歩行不能となった。術後１週間で歩行可能な症例は５例で、歩行不能から可能になった症例はいなかった。観察期間は平均296日で、悪化した症例も含め最終的に10例（91%）が術前よりも症状が改善し歩行可能であった。後遺症として軽度の運動失調が５例いた。改善しなかった１例は硬膜内IVDDであり歩行不能のまま術後10か月で腎盂腎炎により死亡した。

4. 考　察：椎間数に関係なく慢性IVDDの手術成績をまとめた報告では手術翌日に３割の症例で悪化したが、最終的に91.4%で歩行可能であった。今回の調査ではこれらと同程度の成績であった。一方、既報では術後約３日で８割が歩行可能であったのに対し、今回の調査では１週間後で半数以下であり回復に時間がかかることが示唆された。また、約半数で後遺症を認めたことから多発性IVDDでは術後経過に特に注意が必要と考えられた。多発性IVDDに対する複数椎間手術の優位性は未だ不明である。今後はより長期的な術後成績の調査および１椎間手術症例との比較研究が必要と考えられる。